ときの玉手箱

～彦根城博物館からのメッセージ～

第352回

よみがえった雛人形　～文化財修理の現場から～

彦根城博物館が所蔵する美術工芸品や古文書史料の多くは、経年等により劣化が進み、中には、展示できなくなってしまったものもあります。彦根藩井伊家十三代直弼の娘弥千代（一八四六～一九二七）が、高松藩松平家に嫁いだ際に誂えられた雛人形（写真）も、その一つです。

弥千代の雛は、頭や頸に割れが生じ、頭髪も落ちかかり、紙製の衣装の一部が破れて文様の絵の具も剥がれており、痛々しい外観でした。特に男雛の頭部の損傷が激しく、少しの衝撃でも割れが進行して全体が崩壊し、修理不能となる可能性もある危険な状態でした。

弥千代の雛

当館では、数年前から、この雛を展示可能な状態まで修復すべく、損傷状況の調査や修理方法の検討などを行ってきました。そして今年度、県内の文化財修理専門業者である株式会社坂田墨珠堂に委託し、念願の修理を実施することができました。

修理では、頭部の処置を無事に進められるかに大きな懸念がありました。人形の頭という、胡粉を固めた外殻の中に木粉等を詰めた構造のものを、文化財修理業者が取扱うこと自体前例が少なく、対応できる技術者が極めて限られたためです。この特殊な修理に対応するため、頭部とこれが装着された胴芯部については、出土遺物や伝世資料などの多様な文化財を修理する技術を有する、公益財団法人元興寺文化財研究所の全面的な協力を得て実施することとなりました。

男雛頭部は、まず、頭頂部の穴を接着剤と充填剤で埋める処置が施されました。続いて割れ全体の補修も進められ、処置の痕が目につく形で残らないよう、肌色や髪色での補彩も行われました。また、頭内部にはおが屑状の木粉が詰められていた形跡があるものの、虫の食害によって量が少なくなって、しかも、粉状化して流出している状態でした。そのため、接着剤で地道に中身を定着させる作業が行われました。

両雛とも、毛髪の脆弱化と剥落が激しく、動かす度に毛が切れる状況でした。そのため、こちらも強化剤と接着剤で定着させる作業が行われました。男雛は形を整えながら撫でつけるように定着させましたが、女雛の髪は乱れが激しく、復元が難しい状況でした。現状から、当初は後ろに一つ結びの髪型だったと推測されたため、それに近い形となるよう作業が進められました。

衣服については、紙製であるため、坂田墨珠堂が専門とする書画等の修理技術が駆使されました。文様を描く絵の具が浮き上がって剥離した状況だったため、接着剤として膠を用い、定着する処置がとられました。また、本紙の下に、それを補強する裏打紙が下貼りされていたのですが、糊離れが激しく、劣化した状態だったため、これを取り外して新調することとなりました。新調に当たり、衣服全体の解体が必要となるため、同型の模型を作って当初の形を記録し、もとの形に復せるようにするという方法が採られました。

弥千代の雛は、この他にもさまざまな技術が駆使され、複雑な工程を経て修理が行われました。複数の技術者の方々に、様々な工夫を凝らして携わっていただいたのです。

文化財の多くは、先人の修理を経て今に伝えられています。私たちは、これらを公開し、活用すると同時に、可能な限り劣化を食い止め、適切に修理を施しながら後世に伝えていくことが求められています。

【彦根城博物館学芸員　奥田晶子】

写真の作品は、特別公開「雛と雛道具」で2月22日(土)～3月16日(日)の期間、展示します（3月11日(火)は休館）。